

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 フェルトキャンプ エルメル (Veldkamp, Elmer)

フェルトキャンプ氏の論文 “What feels natural: the changing reality of human-animal relations in Korea and Japan(当たり前のように感じること—韓国と日本における人と動物の関わりに関する変容するリアリティ)”は、文化人類学的手法により韓国での2005年3月から2009年5月までの、ソウル等での集中的な約1ヶ月間の現地調査を6回繰り返して得られたデータと、日本各地での2001年4月から2009年5月までの持続的調査で得られたデータに基づき、韓国と日本における現代的な動物観の変容を、動物の死に対する供養儀式の実態分析を通じて解明したものである。韓国では近年ペットブームが巻き起こり、^{サムゲタン}参鶏湯屋の千匹供養など、従前には存在もしなかった動物慰霊祭が盛んに催されるなど、一見、日本と類似した現象が生起している。しかし、それぞれの地域におけるこれらの現象が、歴史的背景の相違から、その形成過程の構造や意味づけが異なることを明らかにするとともに、表面的に類似する行為や儀礼がどのようなメカニズムで顕在化するのか、グローバル化に伴って画一化していく変容のプロセスを明らかにしたところに、本論文の特徴がある。

本論文は、以下のIV部10章から構成される。序章「導入」では、動物に関する人類学的研究や動物供養の民俗学的研究を概観した上で、このテーマを人類学的にどのようにアプローチするのか、先行研究をレビューしながら研究の枠組みが提示される。第I部「動物の死のイメージと記念」では(1・2章)、動物供養や慰霊祭が日本と韓国では、いかに捉えられてきたのか、その相違が検討される。千匹祝い等の歴史的先例がある日本では、20世紀前半の軍用動物慰霊というナショナリスティックな構造の下で、その意味づけを「崇りへの恐怖」から「顕彰」へと変容させつつも、各文化要素が選択的に継受されていったのに対し、その伝統のなかった韓国では、植民地時代に日本人が動物実験室や獣医学科で建立した動物供養塔が契機となり、新たな解釈が施されていったプロセスが解明される。第II部「同棲動物のインパクト」では(3・4章)、両国のペット葬儀やペット供養の展開から、人間と同棲動物との関係性の変化が追及され、特に発生の極めて新しい韓国のそれらが、海外から形式やシンボル・思想等を借用し、「伝統」として構築される過程が論述される。第III部「グローバル・スタンダードとしての動物保護主義」では(5・6章)、韓国の食用犬と日本の捕鯨に対する国際的的非難がインパクトとなった動物観の変容が論述され、特

に韓国の方がドラスティックな転換が起ったとする。第IV部「科学技術世界における人間 - 動物関係」では(7・8章)、日本発祥の電子ペット「たまごっち」と、韓国の伝説的な忠犬が観光資源化されるばかりか、血統まで遺伝子的に創出される事例が分析され、科学技術が生活世界に浸透し、「バーチャルな」動物との関わりが何ら違和感なく、「当たり前」になっていく状況が詳述される。第9章「結論」では、これまで論じてきたことを人類学・現代民俗学的観点から総括的な分析と考察を行い、グローバル化した現代のメディア社会の中で生きる人間の生活世界における「動物」に関して、いくつかの結論が導かれている。

このような内容をもつ本論文の学術的貢献は以下の3点にまとめられる。第1に、20世紀後半以降、動物保護が世界的に重要なテーマとなっていくなかで、異なる文化伝統を有する2国の動物観が、グローバル・スタンダードという西欧基準の「普遍性」が受容される過程で、表面的には類似現象が顕在化する一方で、その意味づけには依然異なる文化伝統の下で解釈が施される、その二面性と受容の構造を明らかにしたことである。

第2に、本論文が人類学的・民俗学的な手法に基づいたフィールドワークを駆使して書かれている点である。当該研究においては文献史料に依拠した本質主義的な歴史学的研究が主流を占めるが、本研究は伝統が単純に連続・維持されていると説くような、本質主義的な動物観に対して、現在に至った複雑なプロセスを丹念に追究することで、そうした解釈に対して根本的な疑義を呈し、新たな解釈枠組みを提示したところに意義がある。

第3に、本論文では、近年の人類学・現代民俗学の成果を踏まえながら、現代に生きる人間が、グローバルな情報や在来の文化要素を組み合わせ、操作している文明社会におけるその生活世界を、また多様な切り口からそのダイナミズムを立体的に解明している点で、現代文化を対象化した人類学的研究として大きな貢献を果たしている。さらに、日本とその影響の強い韓国という文化伝統の異なる二国間の事例を、同時並行的にグローバル化のなかで扱う構成は、西欧研究者としての客観的立場からの斬新さや大胆さが認められるものの、その日韓という設定が本質主義を批判しつつも、逆に本質主義を前提にしているようにも見え、説明が不十分だという意見もあったが、その視角は独自性に溢れている。

審査委員会においては、本論文の論述のなかにはいくつかの不適切・不用意な表現がみられること、さらに先に述べたように、論証や分析の仕方には改善すべき余地があることなどが指摘された。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの瑕疵ではないことが審査員全員によって確認された。したがって、本委員会は本論文が博士(学術)を授与するにふさわしいものと認定する。